

金毘羅參詣名所圖會六

和書門	
二九三五五號	類
一二七函	
二架	
六冊	

庫文閣内	
二九三五五號	和書
一二七函	
三架	
六冊	

内閣文庫	
番號	和 29355
冊數	6 (6)
函號	176 37

地六五

六六



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

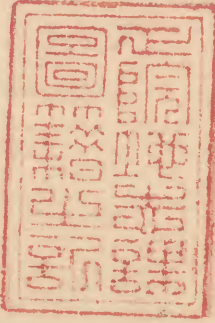
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



同紙



金毘羅参詣名所圖會卷之六

目録

内一〇三四號

- 頼之八幡宮に勝利祈る圖
- 神明宮
- 神馬舎
- 石鳥居
- 行宮
- 大天神社
- 高松鎮城
- 新川
- 弘法大師加持水
- 石清水の宮
- 隨神門
- 中の鳥居
- 道祖神の社
- 神樂殿神楽舎
- 松島
- 瀧元塩濱
- 梵子石
- 石清水本宮
- 多宝塔
- 御供所
- 雨師風伯の社
- 阿弥陀堂
- 訶梨帝母の社
- 阿萬の茶屋
- 相引の潮
- 不喰梨の樹
- 神樂殿
- 薬師堂
- 回廊及橋
- 放生川
- 一の鳥居
- 石橋石鳥居
- 春日川
- 屋島寺前板所
- 畚石

石鍾乳
 千躰堂
 仙人窟
 屋島の浦
 影向墳
 檀の浦
 宗高祈石
 景清勇力の圖
 義経弓握の圖
 佐藤次信の墓
 武礼高松の柴山
 屋島寺
 中門鐘樓
 鉢の淵
 屋嶋の古城
 牟礼高松の松原
 屋島の内裏之古趾
 同駒立石
 小橋太水練の古趾
 盛嗣宗行が鞆と引切る圖
 次信が靈空信が夢中に現る圖
 丸生山
 御影堂
 二王門茶堂
 血の池
 龜淵の社
 次信の碑
 側寄の堂
 扇の的の圖
 同高名の圖
 鞆掛松
 釈迦堂
 獅々の嶺巖
 屋島山
 龜底の古蹟
 安徳天皇の社
 惣門の古趾
 景清鞆の古趾
 義経弓流の古蹟
 黄牛崎
 大夫里の馬の墳
 喜岡寺

金六ノ目

高松左馬之助墓
 古高松の郷
 長刀泉
 辨慶野陣小汁煮る圖
 行忠摩守墓
 平家蟹
 菜切地蔵
 唐人彈正墓
 王之墓
 義経野陣の趾
 浦島下知之記
 喜岡の古城
 王屋敷
 六萬寺の四趾



細川右馬頭頼之
石清尾宮に
勝利を行る

金六ノ目三

石清水宮

高松の府の神の方より一府中の生土神なり此山と亀尾山と号し
石清水の名と合して石清水と稱す

本社 祭神一座 應神天皇 東面山上より

幣殿 本社より 拜殿 燈道の下より 神樂殿御贖所 本社の階下右
の傍にあり

神明宮 本社の左上より 石清水宮 神明宮の
左にあり 尋寶塔 神明の宮の後の山上有
細川右馬頭頼之建立

薬師堂 燈道の下南の傍より 瑠璃 神馬舎 石段の下北の傍より 水馬と
光佛と安んず弘法大師作 納む 水戸郷御寄附あり

隨神門 正面東より 廻廊 隨身門の左右に連る 御供所 廻廊の傍に
あり

及橋 洲前細き川より 土頭小献燈の石燈籠末社小母

石鳥居 及橋の前より 右より下乗の石あり 左の傍僧坊より 阿弥陀院と号し
馬場の東西行程凡十町余道幅凡廿間余左右人家軒とあり

中鳥居 同馬場より 雨師風伯社 鳥居の南の傍にあり

放生川 二の鳥居の向より 行宮 放生川の東北の傍より 前の地度
石橋と架る 例祭の御後所あり

金六六一

道祖神社 左の傍より 門出の神より
猿田彦命と祭る

阿弥陀堂 馬場の右より 南ニヶ寺 観音寺 北ニヶ寺 西願寺 淨光院
覺王寺 圓満寺あり

一之鳥居 此邊に茶屋町あり

八幡宮本紀

当社八延喜八年八幡大神香川郡龜の尾山小鎮座せん 訖宜一給ひりる

時山上小光氣のつて雲間よりやま 漢曲妙音と發は是よりつて國司山の

前小神殿と作し石清水八幡宮と勸請し石清水尾八幡宮と号し奉つる

ある石清水と亀尾山の兩名を取て名付らるるやま

例祭八月十五日放生會執行する又四月三日に祭礼あり是と俗に右馬頭

祭といひ其日の市に右馬頭市と号し其賑はるる言話に絶は此日と

右馬頭祭といふ夏は貞治元年細川右馬頭頼之相摸守清氏と合戦あり

時深く当社八幡宮に祈願して神助とせらるるに靈驗揚馬よりくはわ清



金六ノ二

氏と亡一二年豫州の河野と征伐の時も即當社に請ふ令戰勝利を得ん
 更と祈り深く敬信して出陣に然る小靈驗揚焉一々河野終小防戰
 ころそ能に敗軍に頼之歎歎と唱て稍々香河部笑原の郷に來
 て戰馬戰平の行粧と整當社に奉請あつて之願成就の拜謝と一臨
 時の祭祀と修行して神慮と清しめ給ふ一四月二十日故々今尚例年
 卯月之臨時の祭祀行る是と俗小右馬頭の祭といひ賑いと右馬頭市と号
 以往昔甲冑弓矢と帶一騎馬と打て五十騎二十騎烈とたゞと神前
 し渡り一々も後世其例絶てお一々を頼之故一々つて社頭と修造一
 未社に至るまで結構し神領と附て社余と形の如備分尚邦君と修
 造りて社頭益々觀ありむ神威威隆りて利生凡民の土よ及ぶと
 祭礼の行粧市の賑いよの國ハ一々拾遺の篇小出

又傳云細川頼之河野と攻る時先當社に奉幣一神樂と奏せらるん時
 人廊廟の結負薪の言と聞る榎の茅一りりとして祈願あり丹
 精と抽て祈らるる一々忽ち神殿の龜鳴動一山爐一番宮中一飛來り
 東西小別きて戦ひるる西の方より東の方勝て是と追りて頼之信也
 感応りつて宿願全し開けり嬉し馬物具戦具を用意し阿波土佐後破こ
 箇國の軍勢を引平一伊豫國に向して河野と亡一終一國と至均や一々を
 大天神社 名清尾の馬場の半途より高松の天神と縁

本社 祭神 天満大自在天神 神樂所 御供所 神樂舎 社頭の左
 訶梨帝母社 境内西の傍より 表門 正面 鳥居 同上 石橋 同前の池
 其始り今の稱荷明神の社地一々一と生駒一正公此地小移り則雜賀氏の
 城跡一々社壇の壯觀美と及せり

高松鎮城

香川東郡より往首御城下より前八輪島といふ島ありて

御城北の傍邊より其御要害の結構下民の言をいひて御城邊に武家

方の御屋敷雲霞の如く列り市中商家職家軒を並べて交易工業は

も濠の濱方より數多の舟所せし道に繋ぎ繋ぎ積入るあり揚るなり賑は

夏朝暮となく舟の方より女木島男木島直嶋木西より白峯の山つら東

八島南八阿州の山とまで眺望し風景の勝地國中第一の繁華なりを神社佛

閣許より何れも壯觀端麗なり事繁盛なり以て夜畧し拾遺の希出

松嶋 御城下の傍より二村あり此所後駕屋あり

阿萬茶屋 春日川 新川 づきも高松より八島よりなる街道あり

浮元村 此水村より書り八島より西南の谷より數町の間塩濱より國中塩濱よりとも

相引の潮 此地の塩は最上は播磨赤穂より發り 同村より八島山の南麓より今八川よりて橋を置せり相引川もいふ

郡田山

往昔此地へ海より屋島の南麓を廻り東西に分きてるが故に汐満る時

東西より潮寄来つてその所へ行會する時此所より双方へ分きて引かす相

引の汐とつて古名相引の濱ともいふ今尚細き川となり橋をわたりて

とも汐の満ちる変りて相引の古風残きなり

屋島寺前札所 浮元村より則ち屋島山よりなる是より山上に至ること

弘法大師加持水 麓より十餘町往來の右の傍より弘法大師加持玉ふとる

梵字石 加持水の右の傍より又余の數を宗阿字を鐫り

不喰梨樹 浮元より八島山に登る半腹より今其古樹をみて傍に數木一本生

傳云里俗爲業に此樹に登りて梨の實を採りて居りて折る

僧来りて其梨の實一顆たまりれとて乞ふ里人慣習として閑於此實

食とるものより恰も木の如くと各々後僧爲方りて行とるり一里



長閑なる
 海あり
 海苔あり
 木節
 朝方
 舟あり
 舟あり
 明水



高松鎮城湊口
 萬葉集
 柿木朝臣麻呂作
 玉藻吉嶺岐
 國者固柄加
 雖見不飽神
 柄加幾許貴
 寸天地日月
 與共滿將行
 神乃御面跡
 次哀
 下畧

金六ノ七



金六ノ六



梵字石加持水

南寺阿保陀
夕の那
守武

何心もろく此梨の實を採り歸りて市に賣りて得んと思ふや勿ら木の如くして神も味いむ大い先難と悔むも先はたばくと止めども正しく弘法大師賤民の邪見をばふらんが為かろう給ふりのとをさる行世人不喰の梨と号し末世のつるすとて慈悲の心を生ぜむ基なり

疊石 不喰の梨の地よりほびて山路すべてを重くしつゝの岩のまう至つての羅石鐘乳 疊石の具洞穴より出る窟の中水柱のてり下りて白とく雪のてり

石鐘乳 其能致送上氣と治し月を明くし精と益し五臟と安し百節と通れ丸敷と利し乳汁と下し氣と益し脚弱疼冷と療し陰を強くし久し服すれば年と延ぶ壽と益し奉末を忘む祀とりの言くとおほく云

南面山千光院屋島寺 四國遍れ八十四番の靈場は藤より山より至るは凡十八町なり

本尊 千手千眼觀世音菩薩 弘法大師一刹三禮の作座像の長二尺

金六ノ七

御影堂 本堂の左の傍にあり私法大師と安ん

釈迦堂 本堂の左の向に西面して建釈尊と安ん

千躰堂 釈迦堂の左山の岨にあり観音の尊像千躰と安置し
萬治四年五月十八日邦君徳頼重公御建立

鐘樓 千躰堂の右の向にあり
中門 本堂の正面にあり四天王と安ん

二王門 中門の向に正回しあり
茶堂 本堂の右の向に東向

本坊方丈客殿庫裡に本堂の右の傍に列せり當山の縁起源平合戦

の形勢と画と懸物二幅と藏しむに任せて拜見せしむ至つて古画の

獅子之嶺巖 寺と去事二丁許西にあり日想觀の地ありと云此地より八ヶ國と

仙人窟 其山中にあり一里をゆく有往昔仙人の住し所とぞ

鉢ノ淵 右の峯より乾方八丁許海中にあり鑑真將來の鉢と沉めし跡とぞ

血之池 本坊と去事二丁許にあり傳源平の合戦に血を洗ひし池ありとぞ

當寺に入皇中十六代孝謙天皇の御宇天平勝室六年唐王揚州の鑿真和尚日本此純

淑と阿く来朝の時船中於て遙に此山に瑞光のたけを見て船と海岸よりせと

せ山に登臨し其形勢と觀察以時一人の老翁鳩の杖をうとて出現していつく

此山つとて人間の境にあべ天仙遊化の靈思りり今より此地と足下を授

くド佛法と圓隆して凡夫の患難を救ひ給へといつ勿然として形失ぬ鑑真

とぞんと神秀の地をれとて大に悦び鉢と此山に遺しし印と帝都より

て天皇に謁ひ帝とぞ崇信し玉い東大寺に住りし後大殿の西に戒壇院と構

へらま戒法と行せし此時屋島の奇瑞を奏し帝詔しし屋島山に鑑真

に授け戒律の境と給ふ鑑真とるら我弟子空鉢惠海律師とるら

開基せしむ鑑真所持の普賢菩薩の像と置法華おし華嚴經の普賢

行願品を貽しちるん時二聖二天十羅刹女出現し種々の異異とら

日幾くとも思ひ五十七日とを登り去らまゝに於て風高し
 布に招提寺と創めて後佛舍利三粒ありし喜提樹の珠數を送る其後
 室龜五年弘法大師誕生す少く成長の後空鉢の門に入て戒を受玉ふ故に室の
 字に附給ふ而して當山に來り千手千眼の大悲の像を一刻に刻して作らせ
 まひてあま安置し寺に千光院と稱し真言秘密の道場と給ふと
 元亨釈書卷第一傳智之一曰
 釋鑑真ハ世姓淳于氏ニテ唐土揚州ノ江陽懸ノ人ナリ齊國ノ辨士ル淳
 于髡ガ後裔ナリ中唐玄宗天寶十二年ノ冬副使伴古ガ船ニ乘テ思ノマ
 海上ヲ凌ギ天平勝寶八年甲午ノ正月十二日太宰府着テ程ナク四月帝
 都ニ入表ヲ上テ其將來セル物ヲ献上セラルト云
 佛祖統紀五十四曰玄宗日本國沙門榮齊至揚州律師鑒真与齊附船
 而去王迎勞之館毗盧殿請授歸戒日本律學始此

金六ノ九

屋島山 此山の形速カトテ既む時恰も家屋の如し故に号す

屋島浦 山の麓の海と云

屋島古城 天皇二十九代天智天皇の御宇此地に城を築き給ふと云

日本書紀曰 天智天皇八年十一月築讃吉国山田郡屋嶋城

壱底社 屋島山の麓の河木太村新川の下にあはま

祭神三座 一 牛頭天王 素盞島尊
 二 總光天皇 牛頭天皇の御子に
 三 道祖神 猿田彦命

傳云正曆元年寅八月八日海中小槎ありて一の壱れに従ひ遍く漂ひ終
 入江郷に至る槎の上小物ありて以て村民怪しむ此トて官小告げ余と奉り
 て是と上る其夜里人の夢小人あり其形夜叉の如く頭は牛の角と載り
 了告ぐ言はく余は牛頭天王なり此里民正直して滅ゆること傳ふ此故



屋島寺

當寺本堂内陣之額曰

廣大智慧觀

右五字

邦君之御筆也

同様側之額曰

遍照金剛

三密行所

當都卒天

内院管門

大通南谷書

金六ノ十

尾張國清洲郡より漂流して此地に来る余、あつた祠と建て祭祀せし衆病を悉く除して壽年延長あり福とありと是よりして祠と建て祭祀し奉るかくて漂流する所の壅を以て酒と造る小其味甘美なり是を吞むりの皆惡疾難病を除くこと

壅底

右の壅を待り所なり故に号し今、田圃の字とあり

影向墳

牛頭天皇の上現し給ふ所なり今尚標と残せり

牟礼高松之松原

屋島の東南の麓あり今高松より志度への往來とあり

天慶元年伊豫掾藤原純友追討の大將として左衛門佐倫實下向備前国金島の人戦小敗軍一當國小引退し阿波介國風と語り此所陣と取て絶たの勢と數戦小官軍勝利を得敵と討し甚し純友は勢大敗走して終不備前の国に引退ぐこと

佐藤次信之碑

屋島の東坂十丁下りて麓あり往來のたの場なり此所、壇の浦と昔より云ふ五輪の石塔あり是、義経平氏を攻めたりと云ふ、次信、忠死しとげらるるに因りて後世に志しり、いんが爲不建らる所なりと云ふ寛永年間、邦君此石塔の前、新に碑と建させり

石碑、高凡六尺幅一尺五寸余厚サ一尺臺石高サ一尺三尺四方

下、切石と壇と疊と築り又次信の亡骸を葬り塚牟礼村有興宗記に

次信碑石

此四字碑文上ニ並フ

維年壬午夏、君受封讚州的爲維城助確乎其忠貞真可觀焉一日講武之暇泛蘭漿飛彩鷁吳歌越唱消遥屋嶋偶覽佐藤次信墳墓茲乃命下吏刊負石建碑表義経負於乎君之用意也深矣哉至矣哉次信安死千元曆之昔而啣恩干寬永之今矣其幸矣哉乃命余作碑銘逐畚如左曾若渠系譜載曆日月支跡操行日記所載前史所傳歷々焉章々焉胡

贅余言

於皇次信兮挺干濱危之場 酬恩致死兮百世誰曰不剛
過盤當錯兮顯干鎮之雄 銳識定膽壯兮誠依教養有常
尤可拈者兮維夫在將之良 建碑刊石兮遺烈山高水長
寬永癸未仲夏上院涉筆於高松城下依

大守松平右京大夫源頼重公命 儒臣岡部氏拙齋作之

安徳天皇社 檀の浦の濱邊あり

安徳天皇高倉院の王子諱仁母建禮門院平徳子太政入道清盛盛
娘より治承二年十一月誕生同四年二月高倉院の讓と受二歳して即位清
盛夫婦唯二宮の宣告と蒙る関白基通攝政後白河法皇鳥羽殿執唐
一高倉上皇新院と申せしも政務といろひ給はる攝政も名をうりて天下
の夏大やち皆清盛が依り然る其後養和元年清盛没後宗

金六ノ十二

盛河とて継で政事を行ふ是より前源頼朝關東小義兵といはる九郎義
経奥州より来つゝ加勢以木曾冠者義仲信濃より起る来り所合戦河
平て終平家敗軍とて都といはる平家の二族安徳帝と守護建礼門院
清盛が後室二位尼と伴ひ福有と趣くつゝも留るはて筑はる落行是より
一々京都より高倉院平家王子尊成親王と位し即奉り八十二代の帝の後
鳥羽院是より安徳帝西海漂ひ此屋島自平居り故一世小西帝と云ふ
より安徳帝と先帝と稱は此地より一々一々一々一々一々一々一々一々一々
小至り承平の萌ゆる都て此邊の内裏の田跡とて依りて小社と建るあぶ下
屋島内裏之古趾

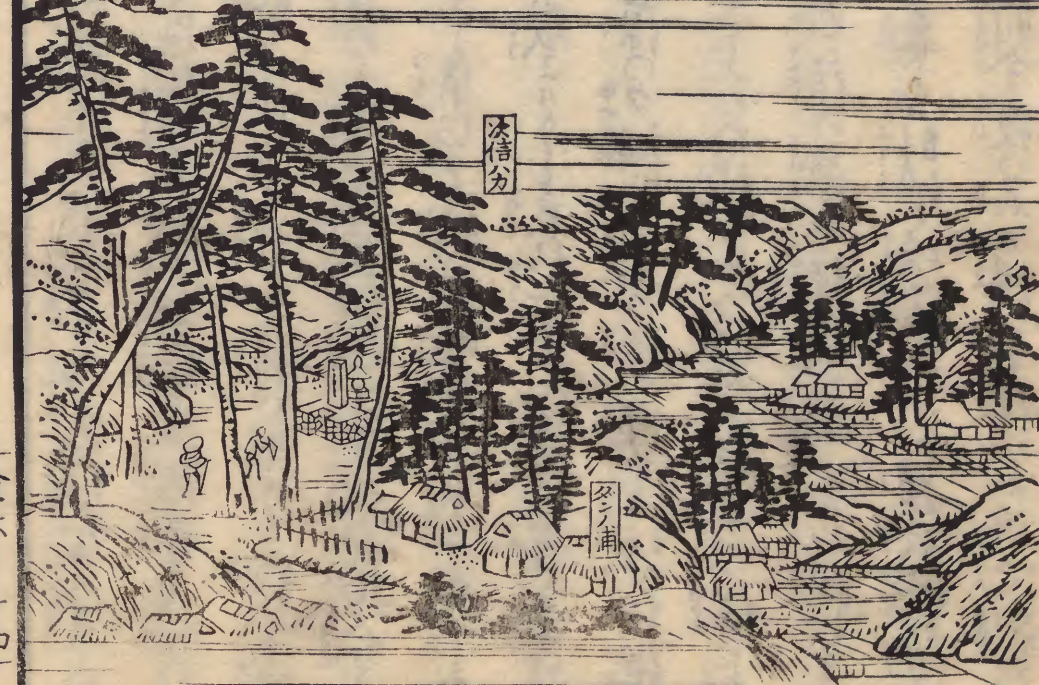
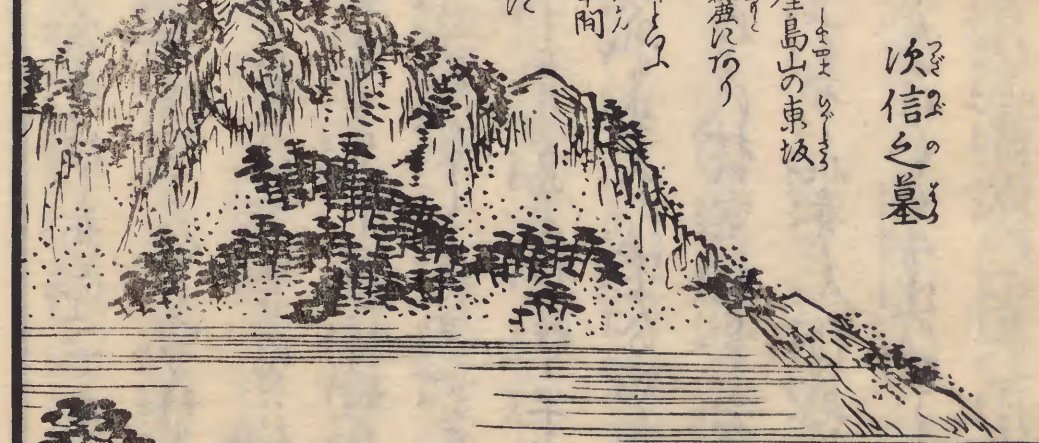
壽永二年九月平家西海小漂泊の時菊池大夫胤益阿波民部成能小此屋島小

乃木宗元ハ
 張良ノ廟ヲ
 脩メ謝氏ハ
 古來ト得テ
 祭マシク先賢
 ノ微意偉
 人ノ翳然
 其ノバケル
 ヤ迹ノ撫デ
 人ト思フ
 我ノ隆ニ
 了ク君子ノ
 欽ヒトシラシ



按
 次信ノ石碑ノ後ニ古瓦五輪ト石塔アリ
 是ハ元暦ノむー我經ノ建トス
 一ノ塔ト云フ

屋島山
 檀之浦 次信ノ墓
 十八町下リテ埜邊ノ所
 此地ノ檀ノ浦ト云
 此碑ハ寛永年間
 邦君ノ新ニ
 建トセリ人
 々々々々



金六ノ十四

空と祿多小左馬頭行盛かくを祿給ひる。

君すも是も雲井は月おれと寝るに都ろろる

と是と閉る人々皆涙を流しりりき

側寄堂 牟礼村小左此地往昔入海の汀うう今田圃とありて細と川とあり

本尊 正観音 弘法大師作 大師堂 本堂小並ぶ 鐘樓 本坊 本堂の左

惣門之古跡 側寄堂の南より屋島内裏の追手の門の有り跡なり高凡一丈余の

源平盛衰記 大且殿小博士に清基との者と御使と能登殿へ仰らるる源九郎義

経既阿波国蜚子の浦小着ると所由定め夜もとが中山と越る

くらん御用意のりし申される去程小夜も明の屋島より鹽干瀉一隅で

武例高松の所焼亡り平家の人りまも焼亡り云れなき成能申るる今

屋島惣門之跡

往昔此地入海の磯邊あり故

惣門は諸惣門の跡あり

傳云平家屋島小皇居と

定めて牟礼高松の海濱小

柵と構惣門として固とあり

然まも潮朝夕に満干

あつて常規か干潮乃

時、船、澳小出と遠ざり

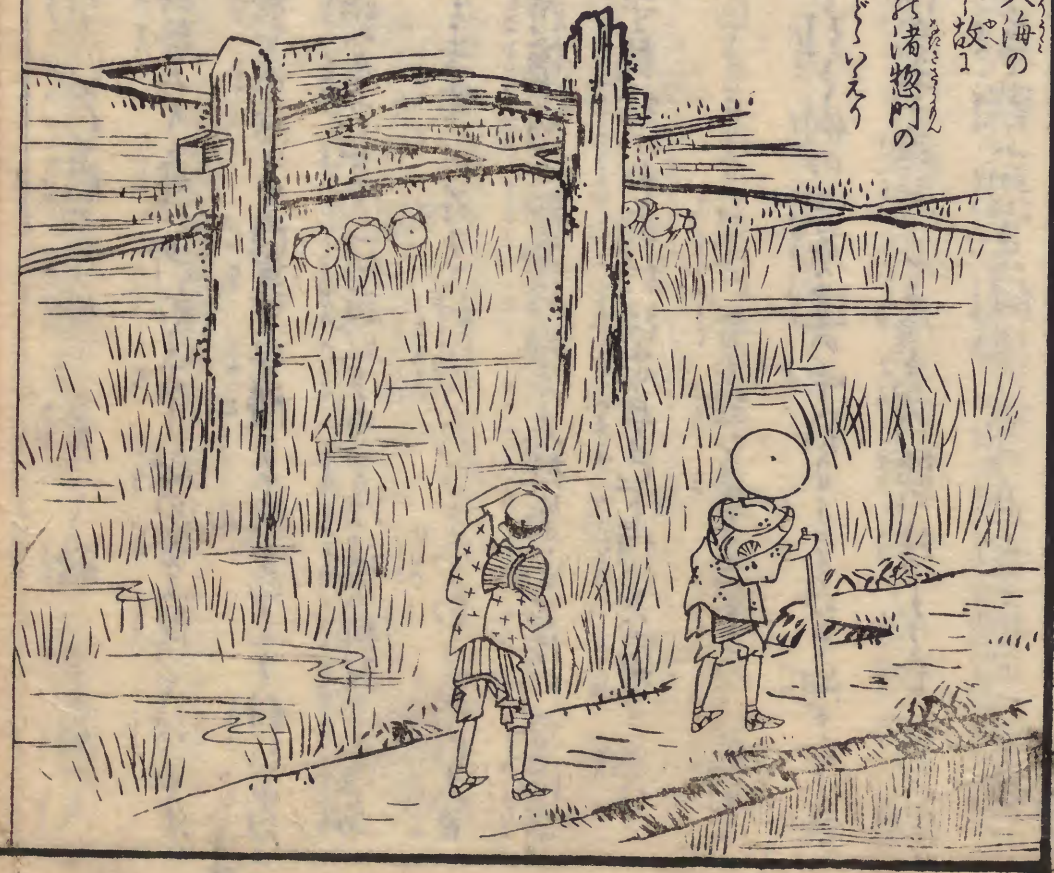
汀の柵干海に残つて徳氏

れ固とあり惣門、源氏に

門を成て平氏の害とあり

城廓とあり人々乃兼と

慮とありとありとあり



焼亡得らるゝ源氏所々火懸て焼拂と覺へる敵は六万余騎の大
勢ときく御方折ふ無勢う急に御船を敵の勢に随つて指せし
御軍の侍も汀小船と用意して内裏と守護して戦ふと針い申け
まは然るべしと先帝と始奉り女院二位殿以下の女房達公卿殿上人屋島
の惣門の諸より御船小舟を去来一の谷を討漏れし人々あり前内大臣
宗盛前平中納言教盛前権中納言知盛修理大夫経成前右衛門督清宗
うり小松将有盛能登守教经小松新侍從忠房已下侍も城中に籠れり
大臣との父子一船に乗給ひしうり右衛門督も鎧と着て打立んと給ひり
と大臣との太制して手と引く例の女房達の中おりりあそ何れと無
慙もれ同廿日卯時源氏五十餘騎と屋島の館の後より貴寄て関
声と發け平家も声と立て戦ふ判官緝地の錦の直垂に坐坐の鎧小

鍬形打る白星の胃濃紅の纒めて二十四指る小中里の征矢金作は刀を
帯り滋藤の子真中より黒馬の太く逞れ小白覆輪の鞍と置き先陣進
んで馬より白沫かき軍の下知しうりりるる
西塔武藏坊辨慶判官申り平家の軍臆しうり侍も此方の斯
むげに兵の小さく見えたる勢ひして戦ひがらんと思ひ侍り此方と女勢不
見せ給ひしことと申れ夫は計らん仲りまは辨慶こそ小軍を以
て大敵とせしうり此方と大軍と見え侍り火と用るる益しうり高松の
里の此方か火とつけて家と焼とせしは尋の兵攻来ると思ひぬと申
りまは實にうりうり敵の来り道の辺に伏兵とせしうり高松は里
と焼小平家の方より兵候の兵と候りて伺りむ此時この伏兵發て是を追
かこれ候知しし注進は是より平軍入らば内裏と出る船のこれ
しとて此舟慶の謀孫子に近而示之遠遠而示之近とせし意よりうり此
尔而示之太く候りる
以上藤井氏の源平拾遺に本々出せり

又曰能登守教経此時大臣宗盛殿に對して申されり敵の兵尋くも此地に去く何
きの國も頼侍るに都と出し事とて數回悔よりい給ふれど其時西國
て頼も思いつれ斯る形勢をわきりし船の事と侮小浮小も終に六七
さまた下今般余ひらひと戦いさへり此方軍兵十金余侍る上回の戦ひ
に勝負とせん義経が事八教経よりせ給へ遠く射かへ近く細討つ討言
下義経と殺侍る東の兵も猛くも何程の事をもせん若戦ひに勝びと
も二百守りぬ然も教経の属る兵の遠くも泰て集りて心のまうに戦ひ侍
る静しを給ひし軍を給へし諫り申されしも宗盛殿より給ひ
で船に乗るひしとん此教経の詞の計いし義経と討せんも有れ
くられも大將愚く諫りを用れば源氏の方大將も兵もかへりて君臣
一致しり故に勝利を得りしとぞ

那須與市宗高祈石

元曆二年二月廿日源平二に戦ふに宗高扇の的をのり此石と目めてと
しり諸神と祈りしとぞ

金六十七

同 駒立石

祈石の向ふ沖の方より同時宗高が小馬と立て扇と射しり古跡
ありしを源平馬の足跡あり傍に標石と云る
那須與一宗高下野国の住人那須太郎助宗高子十郎が弟あり射術と善
とて以て元曆の合戦小判官義経衆軍の中より撰り出し扇の的と射に
む宗高兼りて則ち扇と射し海中に落し西軍も感嘆と云り

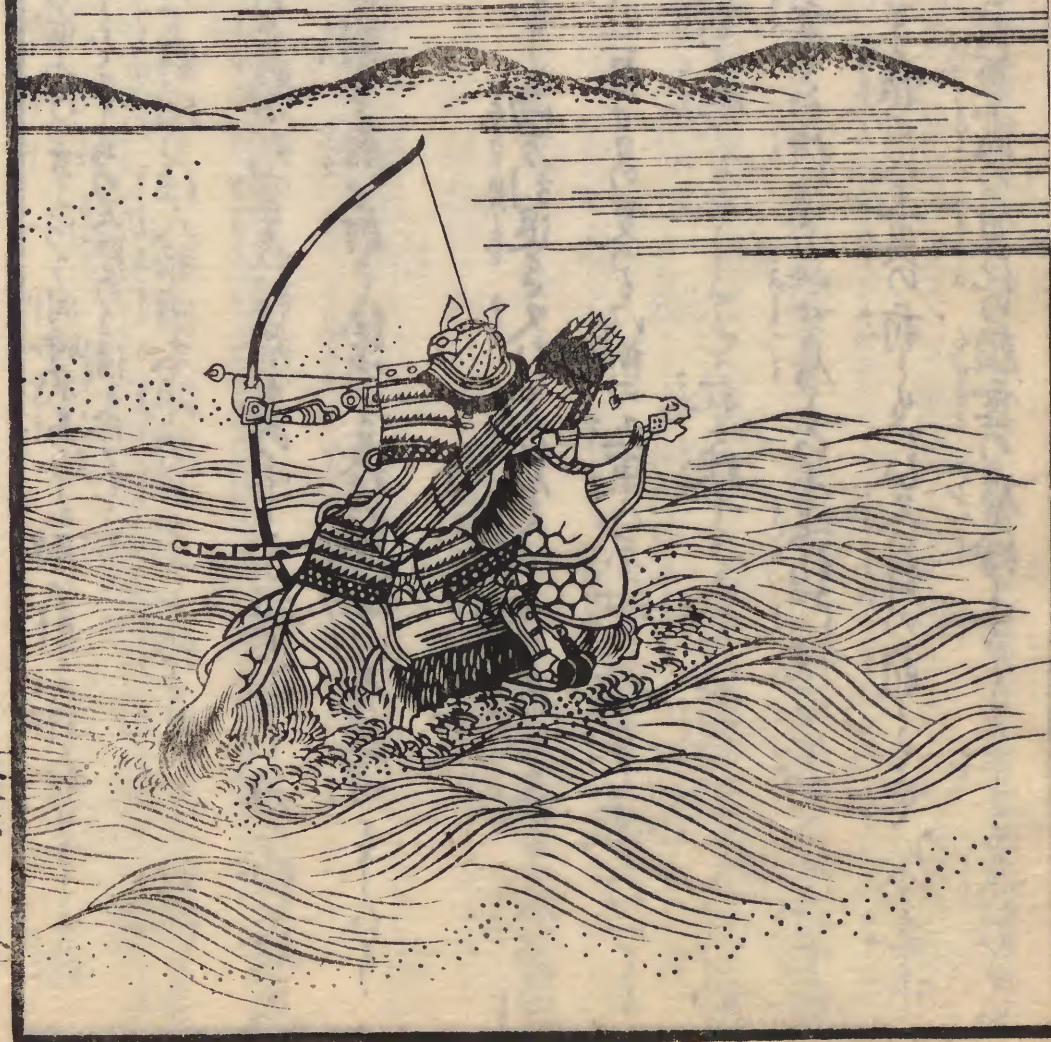
源平盛衰記

源平互小甲乙あり西方引退と又たらんはる所へ沖へ在る船一艘備
小向て漕寄に二月廿日の夏るに柳の五重の小紅の袴着て袖笠あづかる
女房あり皆紅の扇小日出しと枕狭く船の舳頭ひきくられ射
よとて源氏の方を招ける此女房より小建礼門院の后三の時時十介
中より撰り出せる雜司に玉虫の前もい又八舞の前も申し今年十
九と成り雲の鬚霞の眉花の顔雪の層繪し書も筆も及びかに

那須宗高扇と射る

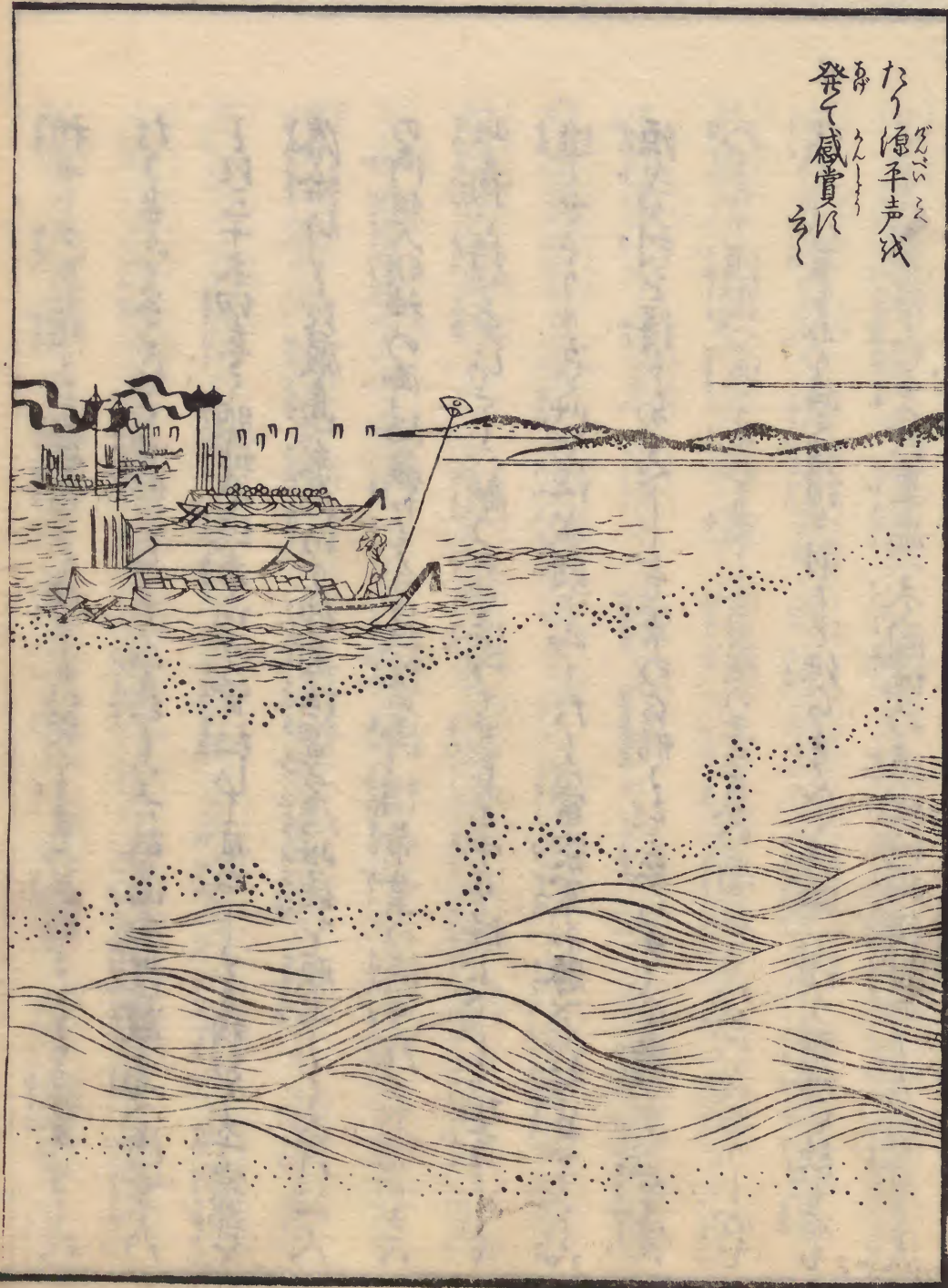
本朝通記

宗高軍騎一々
飾舟に望むる
以疾風浪にらげ
浩漭舟と簸む
宗高八幡の神
祈る風指く靜る
是に於て鼓と
滿て弦と登尺
鏑失長鳴一々
紅扇の中る扇ハ
雲と凌いで飛揚
船ハ空一々行滿



金六ノ十八

たう源平声浪
登て感賞尺
云々



折ふ夕日不耀と最色とも増えれ斯りなき西國まぐも乃其せられ
たりちると出され此物と云ふ此物との故高倉院嚴島御幸乃
と云ふ本切と明神小進奉り皆紅ひ日出しと夜あり平家都と
落給りし嚴島泰社あり神主佐伯是廣此物と取出しとこれ一人
の御絶入明神の御秘藏あり故院の御情帝業の御守たごしとまは
此物と持せありて敵の矢も還つて其身中り候とて祝言とて
進せりりると此と源氏射るたご當家軍も勝べ射負せり
源氏が利を得るたご一と軍の右形とて立ちまると斯く女房ハ
のり源氏ハ遠く是と見く當座の景氣の面白く日と夜馬り心と
迷ふ人もあり此物能く射り候とて頼りまると膽腫と作り難唾と飲る者も
りの製官畠山と云ふ重忠ハ木蘭地乃直垂に搦縄目のよろい着り大

中島の矢負所藤の弓の真中より騎の馬の大違し金馬鞍の鞍は判
官の弓手の腋小進出て畏候義経女に愛る者と平家と云ふ
斯構たて定めて進出て興へん所とて射手と用意とて真中と當
て射落しと謀更と心得る所の射らまると宣へ畠山畏つて君
の仲家の面を存せり上子細と申し及ば但し是ゆり暗藝あり重忠
打物取て鬼神と云ふも更々辞退申し地体脚氣の者あり上此間馬
と振きて氣多とて手とりて覽侍り射損て私恥なる事とて
源氏一族の御瓊瑾と存り他人の御と申し畠山かく辞りる同諸人色
失つて判官とて誰う有べと尋ね給へ畠山當時御方ハ下野国住
人那須太郎助宗の子小十郎兄弟とて加様の小物ハ賢く仕まつ候彼
と召る人ハゆる候り候も強弓遠矢打物おのよとて仲蒙ふは

と深く申切らうとて十郎とて名をよめ候禊の直垂と洗革の鎧片白の胃干
四指たる白羽の矢と笛藤の弓の塗籠と直中取浦と下ふくくろくろけて
そ泰くる判官の角はうれと仰に御従の上子細と申は及びのども一
谷の巖名と落し時馬弱くく子午の臂浅沙うつせ侍りて冬治も
つと愈に小振りて定の矢はうれと候もなせの弟と候も子冠者小
兵と侍も懸鳥的のどつと希る定の矢はうれと候も
俣下とて一と弟と譲とて引とて入無市と名れと其日の装束八掛
村緋の直垂小桃威の鎧鷹用及曾居頭とて二十四指たる中黒の矢肩藤藤
の弓に赤銅はくろの太刀と帯と宿赫白馬の太くなくく子鳥の飛散
たる具鞍おとと乗らうと候もとてみとて判官の前子取とて
と畏とまうあの角はうれと晴乃所作と不覺とてこのとてとて

金六元ノ卅

俣乗らう子細とてふんととて所小伊勢二郎義盛後藤兵衛尉實基とて
判官の前小引居とて面との故障と日既小暮とて兄の十郎とて申は
子細と有とて疾と急に給と海上暗く成とゆくと御方の大事とて早
くくとつとてとて一絨と思ひ胃とて脱置と持と操鳥帽子と引とて薄緋梅
の鉢巻とて手細搔らうと物の方とて打向いと生年十七歳色白く小鬚
おひ子の取やう馬の乗貌と優とる男とて見とてうらる波打際と打寄
てと手の沖と見渡せば至上と始と奉とて因母建禮門院北の政所とて女
房達御船との數漕とて屋形との前後とて御簾も机帳もとてあはら
袴温寒の座とて楊梅桃李と飾らうと塩風とてとて小虚焼東の袖とて
通ふと妻手の中と見渡せば平家の軍将屋嶋大臣と始と奉とて子息右衛門督清
宗平中納言教盛新中納言知盛修理大夫経盛新二後中将俊盛左中将清

經新少將有盛能登守教經侍從忠房侍ハ越中の治良兵衛成嗣惡七兵衛
景清江比田の五郎民部大夫等皆甲冑ヲ帶リて數百艘の兵船ヲ漕ガシテ
是ト見る水主握取ニ至ルナド今日ト暗トを振舞ハル後陸ニ頓キテ
氏の大將軍大夫判官ト始リ畠山莊司治郎重忠土肥治郎實平平武若所
李重佐魚介能澄子息平六能村同十郎能連和田小太郎義盛同二郎
宗實大田和四郎能範佐々木四郎高綱平左近太郎爲重伊勢二郎
義盛横山太郎時兼城太郎家永等漁氏大勢トテ誓ヒ並ニ是ト見る
定の當リト知ラレ源氏の兵多ク手ヲ振リテこれハ沖ノ渚ヲ推ラテ
何處の所モ晴ク思ヒテ其所モ遠浅ナリ鞍几鎧の菱縫板の浸ラズ
打込まレテ亦文の馬もきバ海の中トテとやうり手綱とやうり鎮
むれも寄ル小波ト物怖キテ足もどらバ狂イテ何の事モ急ト見レバ

金六ノ一

折テ西風吹来テ船艦船も動レテ扇枕もたなも緑トト廻リ
々何の所ト射テも覺レ與ハ運の極メ悲シク眼も赤ク心も静メテ
取命項禮八幡大菩薩日本国中小神祇別々下野国日光宇都宮氏の
御神那項大明神弓矢の冥加有ク扇ト座席ト定メテ給源氏の運も極
メ家ノ果報も尽メハ矢も放レ前ニ深く海中に沈レ給ト祈念ト
目ト閉シテ見テもこれハ願座ト静メ有撃ト物の射テも夏山
の滋々緑の木間ト僅ト見ゆる小鳥ト殺シ射ルトト大事カレ捷ト
立タル羽ワリ神カ既メ副ナキ手の下ヲト思ヒテ十二東二伏
の鎬矢ト拔出レハやう々滋藤の弓握ルもあつ打食ラセ能引暫
ら固リテ源氏の方ト今テ打入給レハ七段ト阻
る角の紙ハ白ト出ラレバ恐モアウ數百ト程ト志シテ兵トとら浦



金六ノ冊二

秋齋閑語

響くまては鳴りて牧目より上寸おびてあつと射切らるれば牧目船
留りて扇空より暫く中にひらちれて海へつとどへなる折ふ
し夕日にかちて波漂ふ有るは龍田の山に秋のそま河瀬の紅葉に似
かゝるを鳴矢おもて潮の浮例と覺へる平家船に押しと女
房も男房も射らるる感らるる源氏鞍の前輪籠と扣けて射と
りて感らるれば船もどとどを有る紅の羽の水漂ふ面白く玉貫ハ
射らるるねむや紅をて見はるるは芳路初夜の様なりと
陣角二種は紅白出する角是大将又軍師おりの惣地紅とて日の丸を金
たぐり又紅の日出する角は是副将しつらる惣地金とて日の丸を金と書
しつらる惣地紅とて金の日の丸と書しつらるる

金六ノ卅三

景清朝臣之古趾 駒三若切りに今字と大各地の所其古趾ありてを實否詳らるる

那頃共二宗高知の的と射落し續て伊賀十郎兵衛尉家貞と射倒れ是より依
源氏藤と扣してどとど平家共本意あり思はば指突一人手取一人長刀
持武者一人都合三人小船に乗陸押つけ浦よりと指と突向け寄らるる源氏招
く判官安らぬまらる馬強らるる若武者も馳つて蹴らせし宜はば武藏
国の住人美尾屋十郎同藤七上野国の住人丹生四郎信濃国の住人曾
中次五騎つきて喚てかゝる先真なる進んる美尾屋十郎が馬の左の鞍を
箸の藏り程を射らるる馬尻風とわらひかくる忽ちと倒れれば主
弓手の足と馬手の方下りきて傾て太刀とて抜らるる又指の陰より太長
刀打つてかゝる美尾屋十郎が小太刀大長刀一ト思ひり人見吹ら
逐れは傾て續て追駈らる長刀とて薙んてと見らるる無して長刀と

子の手を脱がねば、狭き馬手の手と、美尾屋が曾の鍛と相せん、其の相せんは、
 逃る二度つゝ、逃る二度の度、相む暫し、勘て見し、鉢付の板より
 ちりちり切て、逃るる、銭四騎馬と惜む、かひは見物して居る、美尾屋
 十郎、御方の馬の陰に、逃て息つゝ居る、敵追ふも来らぬ、其後、曾の鍛と長
 刀の先、貫高く、上へ去る、声高く、遠く、人者、音も聞け、追ひ、目も見ぬ、是を
 京童の呼ぶる、上総、悪七、兵衛、討する者、も景清討する、續け、
 平家、あま、い、少、心、地、直、つ、悪七、兵衛、討する者、も景清討する、續け、
 て、二百、余、人、清、上、指、と、雌、羽、突、つゝ、源、氏、の、寄、と、ま、と、て、招、さ、り、
 此條、普く、人の、繪、巻、と、も、源、平、盛、衰、記、一、見、に、丹、生、屋、十、郎、と、り、の、馬、
 射、ら、れ、落、つ、所、と、景、清、長、刀、と、額、に、つ、て、飛、で、あ、る、十、郎、と、思、ひ、逃、け、去、
 る、と、道、を、追、も、逃、る、も、雷、の、ご、と、十、郎、希、有、と、逃、の、び、ら、る、事、と、書、く、を、追、来、
 の、繪、本、に、此、條、と、載、た、ま、も、其、事、實、詳、し、
 金六ノ卅四

景清頼引



相引の入海、平家の軍門、
 川、田畑の中、景清乃、
 勇戦の、
 七、
 田、
 手、

東鑑曰是清等平士憤之登汀戰美尾屋十郎等逆戰不利
 又輜引切事八越中治郎兵衛盛嗣熊手とりつて小林神五宗行の曾一打引倒
 さんせいに宗行頭と動さる双方引程一鉢付の板より引らるる徳平兩陣乃
 目と驚うやとつる夏りり是等の夏一取交つて附會せしものあらん
 大胡小橋太水練高名之跡 祈名より六十余西北の方にけり

小橋太ハ伊勢二郎義盛が郎等り駿河国田子の浦一生活て幼少に軍
 川にて水練と得水底ハ一日も潜り歩く事と難しとせは源平あはれ公戦の
 時平家方備後国の任人頼一郎といふ六十人カのカ持てる大強の者りり
 と定盛下知して義経近づけたる組で海もつて程隔たると遠矢も射あらせ
 て船に乗らまてり松浦太郎艦とて屋島の浦と漕よりり判官と伺ひらる
 此時小橋太是を見て兵の船に乗る軍もせは漕よりり直者ハ何れも當り大
 將軍は曲者るべしと今も智は焼内裏の芝築地の陰より裸よりりて犢

金六ノ五

大胡小橋太水練高名

鷹ハ水にへく藝あゝ鶴ハ
 山に在て能うとて
 六十人カと剛一剛勇の六郎
 けきも小橋太が水練の謀小
 術あゝ空しく水中に首と
 かれ古伝



鼻禪と掻両刀と拵んで海へ入る御方も曾て是と云くは猶も六郎が船に近づき浮
 上つて六郎が足と懐いて曳声といひ海の中へ引入り六郎も陸地へ上つて六郎の力と
 言れども水へ心得ざりしは深き所へ引入り終小首と取れる小橋太六郎が頭
 かけ切て髻といひくは水底とくくめて御方の陣の町より大將義経其思慮の賢
 と感しめし就鳥作の太刀と賜ふ世静まつて後兵衛佐殿も武藝の道神妙と
 して千餘石の勸賞と賜ふ滅にゆりて面目なり

源義経弓流之古蹟

洲寄寺より正西二丁余あり今ハ川と云ふなり

源平盛衰記
 平家二百余人船十艘に乗楯二十枚つらせて漕向て族と依て散く小射は漁
 氏二百余騎と並つて彼打ぎて歩かせ出て是と射る矢の飛ちて降
 雨のとき源平の叫ぶ音は百千の雷の響くに似たり平氏は浪に浮き降
 氏陸小扣より天帝空より降る終羅海より出て互ひに火燭劔戟を飛せけり

金六ノ元六

義経握弓

詠歌尋訪五
 條宅横笛吹
 回一谷風壯
 士勇名皆若
 是九郎不矢
 楚人弓
 羅山林先生贊



二世休比戦ゆも斯や覺て無慙なり平家射調りまて船も少く漕ぐんは
 判官勝あつて馬の太腹を打て戦ひたり越中の治郎兵衛盛嗣折と得る
 と悦びて大將軍に目とけて熊手と下判官とがけん打つけり判官
 鞆と傾ふけて懸らましく太刀を熊手と打のめり程一服挟
 たる子と海を落る判官は子と取上らんは盛嗣判官とけて引
 とひえより危く見れば源氏の軍兵はれ如何し其子捨のく声く
 申れども太刀と持て熊手と會釈いたの手を鞭と取て檢とせと取れる軍
 兵等が従い金銀とのべる子うも無壽と替へ給ふは浅猿
 申れ判官軍將の子とて二人張五人張かゝる面目るべし去りも平家
 に責はあふれて子と落りて彼に強き弱きと披露
 んて口惜がど又兵衛佐の漏さるんも言甲斐あられ相構へ取らる宣

金六ノ廿七



盛嗣宗行が鞆と引切
 源平盛衰記
 景清美尾屋の鞆引と
 るものゝ盛嗣宗行が
 鞆と熊手とて引切と
 つく是亦の事と後人景
 清も作つてあらん
 う景清の條也
 名高く盛嗣
 宗行がしは却
 つて知る人少

傳云人皇百一代後小松院至德元年四月五日奥州住人佐藤の二門空信と僧此
 地お来り次信の石塔一楯ぐ追悼の和歌と縁は

痛しやあゝの命とつぎ信がまゝに石の苔衣きて

空信一夜此石碑の辺り宿り其夜夢中ふ次信の靈顯まゝ

惜むもよもよと念はるはとてそくもつぎ信

と縁をうらむと一書に信空の何をもはるは武まゝに

佐藤次信由心信兄弟大職冠鎌足公の末葉奥州信太庄司佐藤允治の子あり

兄と二郎兵衛次信といふ弟と四郎兵衛忠信といふ共鎮守府將軍秀衡を臣ま

源義経兵起の時秀衡二士と以て義経に属し兄弟東奥より發て所

の攻撃式功ありはとつ事なり然るに此屋島の戦ひ源平雌雄と争ふ次信

羣と出く大將の矢表に進み教経の矢とつけり此に死にたり

金六ノ卅九



次信が靈空信が
 夢中歌と縁は

四

も理なり敵と亡びて入つて八月月夜経へう義経世より汝身等と
 あそ左右小立んと思ひつると手にとりて取合せて泣くは次信ハ穴壙
 と其と最期の詞とて息絶るると毎慙あれ此と岡もは兵どもと甲
 の袖と紋とらうらうら

義経乘馬太夫黒之墳

次信の墓の左の傍あり碑の形標石とて太夫黒馬埋所ト勅ス

元暦二年二月廿日源平屋島に戦ふの時既し紅日西傾ゆるう郎等の内
 て天王と稱せし鎌田の藤次光政討死し佐藤次信ハ能登守教経の矢先中
 へ死たうらう義経只官悲嘆し給ひ此日の軍は是とて止り武例高松の柴山
 へ飯と給ひて其邊りと尋ひて僧と請り薄墨の馬に金覆輪の鞍と置
 申り心静ふる懇よとて申べれも斯る折あるれば馬鞍とて御房
 庵室にて卒都婆經書佐藤兵衛尉継信鎌田藤次光政と回向して後世と



佐藤次信墓
 太夫黒馬墳

次信の塚と
 吊し

光陰

今

血乃あま

一禪

佐藤次信墓

太夫黒馬墳

吊し給て舎人に引せし僧の庵室を送らまはるる也

此馬ハ始ラ安部貞任ガカリ黒の末トシ黒馬の少小なりたるが早走りの

一物アリ其の馬の中に鎮守府將軍藤原秀衡と云ハ秘藏ありと判官

奥州ト進發の時進らせし馬トシ始の名ハ淡墨ト云フ既ニ宇治川ト

も渡一の谷にも落せし一度も不覺うりれ吉例と言ふと判官五位尉に

成りし此馬に乗たりれ改て太夫黒ト号しり其時身ヲ放すと思ひひけ

れもせめてハ継信光政の悲し中育の路も乗うと引れり兵ども是

と見て此君の亡ら以命と失りんと惜みぬとぞ勇とる然る此馬夫よりて秣

と喰ハ有来草庵へ入れば厩もあはれ鴨部村の極樂寺に送る此時次

信と埋し墓の前を通るに忽ち舌と喰切て倒れ来りんとぞ玄甕の

とてども中義と一死と次信と一とる夏感と絶と長と依と此

金六ノ四十三

地ノ埋と塚の標と残せし時寛永二十年癸未夏邦君是と憐し給し此所ノ碑
と建させのしと 碑文銘ホハハ拾遺の篇に出レ

東鑑曰延尉家人継信被射取畢延尉大悲嘆嘔一口衲衣葬于採松木以秘

藏名馬賜件僧ト云

武例高松柴山 次信の墓の後の堤より末の方より池の向ふ柴山あり其源氏が岡
ト云又棧ト云岡ト云

是則ち源平盛衰記ハ武例高松トハ柴山に依り給して云古跡あり又平家

ハ屋島の焼内裏に陣と取る源平兩陣の間三十余町と隔りたり

前ニ義経此在家と放火し屋島の内裏と攻るもつるハ則ち此傍の在家あり

武例ハ今も尚牟礼村と稱し高松ハ今鎮城の名と稱する故古高松ト云今

の高松トハ別所なり思遠と云

武例高松の間とて義経の考へと言まはるハ平家と追討ハ討ハハ

ふし敵此方の兵の少れを見りて有る二一分て一手ハ先陣とて一残る兵
後より漸々来らむべし源氏の兵多し加らうたりやと思ひ疑ひ
此方の勢いと得ぬと言ひく企せしは是れ考へて有る少く軍ハ
多に採り見せぬして勢いと得て以上は平捨遣出

瓜生山

源氏が國の東にあり同陣所の古趾あり雨龍山とも云

鞍懸松

飯来村の街道の傍より今樹下は小堂ありて地蔵尊と安ん義経の鞍とて

義経阿波国釜子の浦に著し勝浦勝宮と歴て阿波一嶺岐の境より中山
の山口に陣しより翌日引田の浦入野高松の郷にも打過て屋嶋の城へ押寄せ
るや盛衰記見たり此時此の休し東馬の鞍と松の枝に置け馬と休め給ひと云

榮松山喜岡寺

飯来村より高松左馬之助が居城の趾ありと云

本尊不動明王

靈驗奇瑞ありと閉りて拾遺の篇に云

金六ノ四十三

高松左馬之墓

行山志摩守墓

唐人彈正墓

右名碑三基本坊の後より墓前は石燈籠を建てる

喜岡之古城

則ち右喜岡寺の地より高松左馬助は山人といふ二百余人といふ付先

南海台記

天正十二年四月浮田八郎秀家備前美作の兵一万五千人其六人の兵將
二万二千人とて横州に發向し四月廿六日に屋島の浦小到着し北の峯に
旗を押し上り國中の人民をを見え騒動を更けし計あり北の峯分
内狭迫して兵を留めがこれ故に南の峯小侵入此山土代の名城とされ
も山高しと戦いしより用ひし其日下山して牟礼高松より上りも
爰に喜岡の城とて小城あり高松氏世々の居城なり香西伊賀守が旗
下おれ加番とて唐人彈正行山志摩守と兵將とて百余人指遣は高
松左馬助が百余人といふ二百余人といふ城攻守ると云



金六ノ四十四

石末此城堀塹堅固ありとも二万余兵天地と郷音が攻寄るも終小
防戦とて能く二百余人一人も残らば此に討死はとぞ

其後生駒濱岐守正當國と領し給ふとて唐人彈正の男判右門七百名
て召抱らるる山志摩の男九左門百五十名とて召出されしとぞ

平家蟹

屋島の浦よりつづる其形ら甲の鬼面ありて怒るがごとく土人云平家の勇
士戦死の靈魂化とるるところありしと全くと好ま者の附會とるるところあり
此らに似たりは皆所よりつづる其名と異なり

本草綱目云蟹之小者名鬼蟹食之害人と則是也

兵庫及び明石の浦の鬼蟹俗稱く武文蟹とて其大とて尺一近し元弘の
乱に泰武文攝州兵庫の海に死に故に号く享祿四年細川高国に好む柄
州に戦ふ時細川の家臣嶋村何某敵入と狹て尼奇の水中に没死に故に尼奇
の浦小生とて小鬼蟹と俗呼ぶ島村蟹と白其大と二寸圓くして腋の女鬼面のじ

中海岸ともあつて流石平家あり

涼菟

蟹のつづみはくく八幡の虫は杖

玉鉉

蟹乃月小月呀かつる屋島と申

箕山

神櫛王之墓

太夫黒の塚の上の方小なり土人王墓又大墓青墓とて云り又王墓山
陵ありん

神櫛王八人皇十二代景行天皇第十七王子とて當國と領し給ふ故に屋島

山に宮と造りて住せ給ふ處とて後此所を葬るとり又神櫛王の御館の趾

とて字に王屋敷とて地は是に惣門とて一丁并東の方なり

長刀泉

王墓より一丁余南田圃の中にあり昔武藏坊弁慶長刀の石とて以て穿せ
井ありしとて叢小埋むとて至つての清泉なり名切水とて云

菜切地藏

同野の山の上よりあり此辺とて源氏方野陣の趾とて右長刀の泉とて以て兵
糧とて綱此石の地藏とて倒して精盤とて長刀とて菜とて刻しとて故に後
菜切の名とて菜とせりしとて
且君は錢の鉢あり
土人口碑に残まるとて次お著る



義経の
陣と張る
武藏坊辨慶長刀
穿ら水と出けけららの石の
地藏と倒して真菜板と菜を
刺しけけけ一和判官にすけられ
義経たはあま
弁慶が整へけけ武蔵坊
トのすけられ弁慶とあり
左指はしけ
九節判友

金六ノ四十六

六萬寺之旧趾 辛礼村にあり

當寺入皇四十五代聖武天皇の御願より國中の民庶六万余戸の力を合て
建立せし如監あり壽永二年の冬平家の一門屋島に來り籠城のし平家の
一族経浦房阿闍梨祐圓本三位中將重衡但馬守經政此寺小入て止宿し海内
疲勞と休められ時各和歌と詠し佛殿の内陣の戸小自筆りと書附年号
月日とて結置きしとて
塔も遠山寺ありて來て後乃浮世とてしほくの邪 權中納言重衡
ついでに廿四の寺に墨波乃衣はそととほく後々ん 経浦房祐圓
世の中昔話よかむもど紅雲此をい見せありるも 兼但馬守經政
元暦二年依藤治信戦死の時兵器と此寺に納む又源九郎判官鎮守明神祈誓
の願文あり元徳年間高松二郎本地堂十五堂鎮守宮権現祠とて建立し八貞

治平間細川頼之金堂佛像を修補し蓋先將軍御菩提を吊ひ奉る爲り
とぞ又於春境内の竹木を伐禽獸を殺し標を立る永徳元年寺主
善観僧都阿讃の衆庶を勸進して伽藍を修理然るに天正十年長曾我部
泰元親當寺に宿陣し其古き物諸を閉て只管に感得往古の心遇心地を
して珍勝小思をもちて羽出立し志渡の浦に趣き原の大町を過る時分
此寺焼亡に元親志づき驚れわきまを遠く隔てわきまを方け其所馬
と留りて出火の巨細を細く推波の下部が業あり元親是を憤りて
彼下部を斬り首伐四本竹にけり罪の札を立て通られしを此時靈寶
什物のごとく焼失し今た其名の残り尚今の諸堂は後世再建す
る所々々往古の跡を廢せざるものなり當時の堂舎の図はかく後
篇に出る

天正十年十月下旬長曾我部元親、阿波國大西白地の城に歸り伊豫諸藩降
参の緒將交代を平木の城の在番と勤む其時豫州の兵將海路より往來
て屋島の浦に船ぐり六方寺の焼跡に鐘樓一宇残りしを此鐘と
取て豫州へ送り石槌山前神寺の梵鐘と其鐘の銘分明しと今に存せり
六方寺の伽藍たゞ推て知るべし
或回屋島牟礼高松志度の浦、狭洞巖窟の境に繁榮の地あり何の故
と以て伽藍高大ありとありや、向ふ答て曰伊豫濱岐、海濱浅うて船が
りく此浦、山向へ二里、海底深く數千の船も繫ぐ、是を以て繁昌
の古と今と異なり、當時と以て較ぶれば、代に遣唐使を立て諸法
則を受て、我國の法則と立給ひ朝廷二百官職掌成備て天下の政道
分明に執行いひ凡民は田圃を阡陌と分つて租税成收納せむ故に山田

郡の阡陌とて王制の基本と依り此浦繁昌して其名高一牟礼に六万寺あり庵治亦万貫寺あり万貫寺の因基僧一人一銭の助力と勸め百万人の放財と受て建立する寺あり故亦万貫寺とあり時去り世久しき寺院断絶とてとも名の残りと王代の餘波と寛文年中牟礼の村長中村某とつ者草廬と六万寺の蹟と造る燧山の律師と招居して庵主と邦君とあれと美言して六万寺と寄附して昔の跡と後世に垂ゆふと老父夜結記に見つる南海治乱紀續州浦島下知之記云

應仁元年夏細川勝元より御教書と下り給ひて櫻洲浦島に御智れて白今度防州凶徒有渡海之術當國浦島之諸人堅守定法不可為海路之禍殊至海島之漁人者召集于本浦可令安居也海邊之頭人等當集知應仁元年五月日判右國中の緒將出陣の時海邊と守る浦長より先引

金六ノ四十八

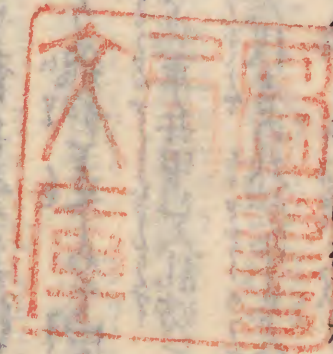
田之本松寒川領也小豆島属之津田志度安富領也屋島香西香西領也直嶋塩飽島属之宇足津御所所奈良領也度津觀音寺香川領也菅水崎属之各守排兵有て其浦と守管領家の命と受行ふ也又豫州能島兵部大夫より飛船と走りて曰今度大内家河野家の軍兵君命に依て上洛せむ所也軍兵甲し人乱妨と禁止し船中雜用ハ價と出て價之押買と禁止し船頭人役者の外船中より人衆上陸と禁止し海島諸浦の人等宜知と之也と制札と出りて浦長遣一通船に故海邊も騒動せし通船は愛もろ是彼我共公儀の役として私にゆゑ事と示以者也に政と云つて滅の道と行ひて人知れぬ事なり是故に洛中へ敵と成身方と成て戦いと挑むるも海邊の地下人傳財貨と通用し何の煩勞もあらず云々右の條ハ此地に拍りける事と云へも浦島の因より云々

書林

弘化四丁未年三月新刻

同 順慶町心齋橋	同 南久宝寺町心齋橋	大阪	京都三條通寺町	同 大傳馬町二丁目	同 芝神明前	同 日本橋通二丁目	江戸日本橋通二丁目
堦屋	堦屋	鹽屋	丸屋	丁子屋	岡田屋	山城屋	須原屋
定七	新兵衛	市郎治	善兵衛	平兵衛	嘉七	佐兵衛	茂兵衛

金毘羅参詣名所圖會卷之六 大尾



是下次八栗五剣山の靈場と始り志渡の浦の古跡志度寺の縁起海上の物語より長尾寺燧山靈芝寺及び津田の松原鶴羽の濱白鳥神社大窪寺畫跡の樓小叢の瀧佛生山虹橋一之宮龍の宮中間の天神六毒山其餘此編に洩たるは悉く著し且西濱小松尾寺雲邊山又古城乃跡古戦場の軍終亦悉く圖繪と加て後篇に嗣ぐ出づ者也

曉 鐘成謹誌

